

編集後記

「わが国も含めた国際社会が知識基盤社会への移行に伴い、大学教育のあり方もまた変容しつつある。わが国の高等教育進学率も 50%を超え、ユニバーサル・アクセス時代に突入し、だれもが大学に入学できる時代の大学教育はこれまでの『選ばれた学生』から『選んできた学生』への対応が求められる。」

これは、今から約 10 年ほど前に、「特色ある初年次教育の実践と改善」とのタイトルで平成 15（～18）年度・文科省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された報告書の一部引用であります。このプログラムは、大学においてそれまで主とされた研究と並んで、大学教育もまた実質上、重要な大学の責務と認識された始まりとみることが出来ます。平成 14 年度設置された大学教育機能開発センター（本センターの前身）の主務である大学教育とりわけ初年次教育として同時に開講された教養セミナーもこのプログラムの中心の一つに組み込まれています。その後、教養教育・一般教育も学士課程教育に名目ともに組み入れられ、一貫した大学教育のもと、教育の質向上をめざして多様な教育改革が実践されてきました。

さらに平成 25 年には大学教育機能開発センターとアドミッションセンターが合併し、大学教育イノベーションセンターとなり、入学者選抜の調査から学士課程教育に関する調査まで総合的な修学支援を行うシステムの構築が期待されています。本巻の巻頭論文にもありますように、平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム（AP）」の採択も、新しい本センターの重要な業務や役割への評価や期待によるものと思います。

本センター紀要も今回、第 6 号を発刊することができました。上述しましたように、大学教育やその改善がますます重要性を増すなか、教育研究に関する優れた論文や調査成績の報告の場である本紀要が、教育改革や教育改善への処方箋となりますことを願って編集後記とさせていただきます。

平成 27（2015）年 3 月

編集委員を代表して 高橋 正克